

第26期 国立市社会教育委員の会（第9回定例会）会議要旨

令和8年1月28日（水）

[参加者] 内田、寺澤、堀、荒井、横山、根岸、田代、大森、松塚、生島

[事務局] 井田、楠本、関

生島議長 では、お時間になりますので、寺澤委員はじきにいらっしゃるかと思ますので、始めさせていただきたいと思ます。第26期国立市社会教育委員の会（第9回定例会）を開会いたします。

寺澤委員は後ほど駆けつけられるかと思ます。本日、御欠席の連絡はいただいていないということでよろしいですね。はい。いただいておりますので、定足数に達しております。本日の会議を始めさせていただきたいと思ます。

それでは、まず、本日の配付資料につきまして、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局から説明させていただきます。

まず、皆様から見て右側のほうから説明させていただきます。まず、資料1、「シルバー学習室ヒアリング記録」、そして、次が資料2、「子育て短歌入門講座ヒアリング記録 まとめ」と書いてあるものです。続きまして、資料3が「子育て短歌入門講座ヒアリング記録 詳細」と書いてあるものです。続きまして、資料4が「国立市生涯学習振興・推進計画中間評価」と書かれているものです。そして、左側の山です。こちらが前回の第8回の議事録となりまして、その下が公民館だより、図書室月報、「いんふおめーしょん」となっております。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

それでは、次第2のヒアリングの報告について、入っていきたくと思ます。昨年末のことになりますけれども、12月17日にシルバー学習室、そして12月19日に子育て短歌入門講座のヒアリングを行いました。今回は、そのヒアリングに出席していただいた方々、特にシルバー学習室については記録作ってくださいました堀委員、それから、子育て短歌入門講座につきましては横山委員からまず御報告をいただきたいと思ます。それで、いらっしゃらなかった方もありますので、皆さんでまずそのことについて共有をしていきたくと思っています。聞き取ってきた内容につきましては、個人の機微に触れる情報も含まれておりますので、皆様方、特に御参加いただいた方々ですね。もちろん、いろいろ補足説明であるとかしていただきたいと思ますけれども、気をつけながら報告や御意見をいただければと思っております。

今、これからの進め方なんですけれども、2つのヒアリングの報告をさせていただいて共有したいと思していますが、2つ同時に報告をばばばっとするのではなくて、一つ一つ丁寧に確認ができればと思ます。ですので、まずは最初に堀委員のほうからシルバー学習室のヒアリングの報告を受けて、これに対して特に補足の説明が参加された方からあればしていただければと思ますし、参加されていない方からも、ここはどうだったのというようなお話、御質問をいただいて、まずはそこをしっかりと確認を取っていきたくと思ます。その上、その後に今度は子育て短歌入門講座というふうに手順を踏んでいきたくと思ますので、そのつもりでお聞きいただければと思ます。

では、堀委員から、シルバー学習室のヒアリングの報告につきましてお願いできればと思ます。よろしくお願いいたします。

堀委員 手元の印刷物を御覧ください。

12月17日の昼過ぎに、公民館小会議室でヒアリングを行いました。話してくれた方は、シルバー学習室という国立公民館主催事業を1年間受講した後、学習室を終えた方の有志が組織して40年も続けている心遊会という自主グループに、翌年から参加して活動を続けている方でした。そういう女性が1名、話してくれました。ヒアリングに参加した委員は、私を含めて6名です。生島議長の質問で進行し、ほかの委員が追加質問する流れで、13時15分から14時30分ぐらいまで行いました。

ヒアリングのまとめ方について話します。事前の社会教育委員の会で、どんなことを聞こうかと考えた質問項目があります。Q1からQ5と整理してありました。当日に話を聞いた順序は違っても、その質問のQ1からQ5に沿って内容を整理しようかとも考えましたが、結局、その質問項目に落とし込む整理はしませんでした。理由の一つは、対象者が1人だけだったことです。複数の方がいれば、聞いたことを質問ごとに分解して並べることが合理的だったかなとも思いますが、対象がお一人だったこと。それから、話された内容が、シルバー学習室の受講体験だけでなく、シルバー学習室1年、心遊会に移って2年近くという、つながりある2段階の経験があり、それを連続して話していただきました。2段階は分けられないお話だったし、想定した質問項目ではあまり話されなかった項目もありました。話してくれた内容を分解し想定した質問項目に当てはめるには無理があり、分かりにくくなってしまった感じがしました。今日は、別の活動のヒアリングの報告もあります。別のヒアリングと比較をすることになれば、Q1からQ5に整理した報告の比較がいいかと思いますが、そういう方法は取りませんでした。お話ししてくれた内容本位で要約を行いました。それを報告します。ほぼ、質問の時間経過に沿ったまとめです。

(質問) 現在は心遊会で活動していると伺いました。その活動は、国立公民館のシルバー学習室に参加したことからは始まっていると聞きました。心遊会での活動を伺う前に、シルバー学習室に参加した動機からお聞かせください。

(答え) 私は、ずっと常勤で同じ仕事をしてきた。結婚し子供が生まれても、1年の育児休暇を取った後は職場復帰し、子供を保育園に預けて働いた。その仕事を自分は向いていると思いき、続けた。定年退職した後も関連した仕事に就き、生涯現役というか、ずっと働きたいと思っていた。2023年、74歳になった時、やり尽くしたという感覚が持てて仕事を辞める決心をした。

国立市には20年住んでいる。前から、自分には仕事の中では様々な人との出会い・付き合いがあるが、生活する地元には友達はいないなと思っていた。マンション住まいで近隣とは互いに距離のある暮らしだった。仕事を辞めた後、老後に向かってここで暮らすのに、市内に知り合いがほとんどいないのはきついなと思う。

国立市公民館が主催するシルバー学習室は前から知っていた。参加した方からいい経験だったと聞いていて、仕事を辞めたら入ろうと思っていた。

23年3月に退職し、5月から始まる、その年度のシルバー学習室に申し込んだ。幸い、参加することができた。

(質問) シルバー学習室に応募する時に期待していたことは何ですか。

(答え) この事業は、「おおむね60歳以上の市内在住の方」が応募条件となっている。年齢が近い、ある程度固定したメンバーが、会い続けるというような体験はあまりない。週1回、1年間、一緒に過ごすということは、その中でいろんな話もできるだろうし、親しくもなれるだろうと期待した。案内チラシは見ていたが、シルバー学習室の中で毎回どんな活動をやるかということとはよく

分かっていなかった。

(質問) 1年間やってみて、印象的だったことは？

(答え) 1年間の講座なので、参加者の1年後の自立を目指し、公民館から参加者に役割分担などを振ってくるのかと思っていたが、そうではなかった。シルバー学習室の1年は、言わば受け身で、楽しく学んでいけばよかった。

実は、自分はこの年6月に、突然、乳がんが見つかり、気持ちは大変だった。毎週同じメンバーにお会いしていたが、最初の自己紹介で、がんで長期闘病中だと語った方がいた。また、自分は「がんだと分かった」ということを話すと、今、実際に闘病中だという別の方や、前にかかった経験をフランクに話してくれる方も多く、仕事で出会う関係とは違う、こういう関係性は貴重だと思った。

シルバー学習室は、毎週、いろんな文化活動をする、体を動かしてみる、地域を歩いて知るなど、言わば趣味の講座だが、それを同じ方々と一緒に体験するのは楽しいことだと実感した。

(質問) 講師から学んだこと、あるいは講師以外から学んだことは何ですか。

(答え) シルバー学習室では毎週違うジャンルで、講師の先生が教え指導してくださる。どれも柔らかな教え方と促しで自分は何も知らないと実感し、毎回、楽しく参加していたが、私の場合、受講者同士で仲間づくりができたことのほうが大きい。

(質問) シルバー学習室を通じて、他の自治体と違った社会教育ができているのはなぜだと思いますか。

(答え) メンバーを20名と絞り、1年という長い期間で温かく育てるところが決定的に違う。公民館の講座の中で関係を育てていくことが、卒業後の次の関係を育てていくことにつながっているのだと思う。

(質問) その後、心遊会に入ったわけですが、その関係は？

(答え) 心遊会は、公民館主催の1年間の活動を終えた方たちでつくる自主活動サークルで、会費を集めて運営も自分たちで行っている。創立して40年になる。シルバー学習室終了後、心遊会に入る人も入らない人もいるが、最近ではほとんどの人が入る。この頃は、会員数は百六、七十名ぐらいで安定している。

心遊会の年間スケジュールは、「ふれあい広場」という大きなイベントと「総会」。年によって違いはあるが、ほかにも様々な全員に呼びかけるイベントを行う。会の「おたより」を年2回発行して、会員に配付している。

会の中に、現在は11の趣味のサークルがあり、活動の中心はこのサークルである。掛け持ちでそこに入って活動している人もいるし、心遊会に入ってもサークルには入らない人もいる。たくさん入って途中で辞めてもよし、入っても必ず参加しなくてもよい。前は活発に活動していたが今はサークルに入らず、「おたより」や「ふれあい広場」の行事を楽しみにしている方もいる。

シルバー学習室の年間プログラムの中に、心遊会の説明会があり、サークル活動のお試し参加も行っている。

(質問) 公民館のシルバー学習室で1年、その後、心遊会に移って2年近くになりますが、どうですか。

(答え) サークルには参加しているが、自分には、心遊会の入会直後に「心遊会の会計をしてくれないか」と頼まれ、何げなくこれを受けたことが大きかった。たまたまなったが、役員にならなければこれほど一生懸命になれなかったと思うし、人間関係の広がりや出会いにも恵まれなかった。様々な貴重な体験ができたと思う。そこですばらしい会だと感じ、会をなおよくしようという意識で参加している。その後、40周年だから記念行事をしよう、記念誌を作ろうということにもなり、忙しい。

長年、仕事をする中で自分は人見知りのところがあると思っていたが、シルバー学習室で、人と関わっているいろんなことをすることが楽しいと思えたことが

土台になった。関われる人の幅が広がったし、仕事を辞めたら自分はどうなるだろう、寂しい、と思っていた頃からは今は考えられない。

会計をやると、いろんな人に相談する必要性が生じ、関わりが深くなっていく。会費未納の方へ連絡をすることがあり、シルバー世代である会員それぞれの事情や、事情があれば支え合おうと動く会員同士の関係が見えてくる。大変だが、それが学びともなる。

例えば、自分が認知症であると言える人間関係、それを受け入れ支え合える心遊会内の信頼関係はすばらしいと思う。自分も、そうになったら言えるようになりたい。

仕事の場合での、いろんな世代が同時にいる人間関係と違い、シルバー同士の人間関係は、ざっくばらんで隠し事が少なく、心地よく感じる。

会員に新たになる人は毎年おり活動は盛んだが、役員になろうという人は実はあまりいない。私は役員になってよかった、得したなと思う。

(質問) 国立市のシルバー学習室事業と市民の自主活動である心遊会の活動をどう思いますか。

(答え) 自分は実は児童館の職員をやっていた。地域の中での子育てとか、母親同士のつながりができていくところは仕事の中で見ていて、大事なことだと思っていた。

しかし自分たちのことを思うと、退職後に新たに自分たち自身が地域の友達がつくれているかということ、そういう人はほとんどいないようだ。国立市のことを話すと、すばらしい、自分の身近にはいないと言われる。

勤めていた区には敬老館などの施設はあるが、地域に住むシルバー世代の付き合いを育む区の事業があるようには思えなかった。1年のスパンを区切り、同世代の固定メンバーで関係を育てるという方法が、決定的に違うと思う。それが、学習室終了後の次の活動、心遊会の活動を育てているんだと思う。

以上、このように、私はヒアリングを要約しました。

生島議長 ありがとうございます。非常に的確に、そのときの様子を本当に思い出せるような形でまとめていただきました。ありがとうございます。

このような内容だったということなんですけれども、むしろここではいらっしやなかった方々とも共有できるような時間としたいと思っていますので、この日いらしていなかった方、今お聞きになって何か、こういうところはどうかだったのかとか、ちょっと確認があるとか、そのようなことをまずお出しただければと思います。参加された方に応答してもらおうというような形で進めたいと思います。また、御参加いただいた方々で、特に自分はこういうところが印象的だったんだけど、ちょっと今触れられなかったのでぜひというような追加のこともあれば、ぜひお願いできればと思います。いかがでしょうか。

荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 まとめてくださって、ありがとうございます。私の中で見直していて記憶に残ったのが、幼なじみじゃなくて、老なじみというふうにご本人がおっしゃったことです。それはとても大切とおっしゃっていました。あと、学んだことについてですが、国立について、地元、地域について学ぶことをもっとしたかったとか、心遊会のほうで俳句のサークルに入っているということで、自然観察をしながら俳句を作ったりとか、そういう活動もしていると。私の反省として、成果物があるところは取材しやすいからやったんじゃないかみたいなことを前言ったと思うんですけど、創作をするとか、表現するとか、そういう何か残るものがあるということがとても活動にとってはいいんじゃないか

なということを改めて思いました。

この方は74歳から参加したけど、今この講座に参加する人は80代からの参加者も増えているとおっしゃって、60代から募集しているけど、幅はあるんだなと思いました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。大事なことを追加していただきました。印象的でしたよね。老いなじみという本当に言葉、これは決まったワードというんじゃないなくて、むしろ自分の言葉として作ってこられたというような感じなんですけど、表現されたということがありました。

今のような形で補足であるとか、この辺が特に印象的だったというところ、付け加えていただいても結構ですので、どちらからでも御発言いただければと思います。

寺澤委員、お願いいたします。

寺澤委員 想像できる感じでまとめていただいて、本当にありがとうございます。その中で、この方に限ってなのかどうか分からないんですけど、やっぱり学びというよりは、むしろ人間関係の構築とか、そういうものを求めているのかなと、いろんなところから感じられたんですけど、この方がそうだけで、ほかの方はどうなのでしょう。その辺りの感覚的なものになるかと。

堀委員 寺澤さんが言われたことは私自身も、当日、ああ、こうなんだと思ったことでもあり、大事な指摘だと思います。

事前の会議で質問項目を考えた時に、内田委員が言われたことですが、「学び」には、講師から提供される知識や技術と、集団で受講することで、集団の中で学び合うことの、講師から教わる内容とは違う手応えや意義があるだろう。そのことも加えようと提案されて質問項目ができました。

私もそこはすごく印象に残って、ヒアリングの時に意識していたのですが、寺澤さんが言われたように、そういうふうにはならなかったです。逆に言うと、質問項目Q1からQ5というふうには整理できないと思ったところです。

改めて考えると、シルバー学習室や心遊会という活動は、何かのテーマの知識や技術を伝授することが主目的ではなく、シルバー世代の地域の人間関係を育むようなことが主目的なのでしょう。1年間シルバー学習室でやる講座も、毎回毎回、自然観察だったり、国立市の地域のことを知ろうであったり、簡単な料理を作ってみようであったり、内容が毎回違う。そういうことをしながら人間関係を育む練習をしましょうみたいな感じかな。講座の目的そのものが、言わば関係づくりのオリエンテーションみたいなものかという感じがしました。このことは、話してくれたこの方に限らないで、シルバー学習室から心遊会へという流れでは、割と一般的な参加の仕方なのかなという感じがします。

ヒアリングに参加していた、ほかの委員はどうでしょうか。

生島議長 いかがでしょう。この方がすごく、特にということではなくて、やっぱり人間関係をつくるということが講座の一つのポイントにもなってもいた、なっているんだということは、ほかの方もきっと参加されている方は共通するんじゃないかという。

堀委員 ヒアリングで話してくれたのが、たまたま1人だったのですが、恐らく講座そのものがそのような構造なり、そういう性格の活動で、生島さんが言われたように、ほかの参加者も多分、恐らくそうではないかという感じはしました。

田代委員 いいですか。

生島議長 はい、田代委員、お願いします。

田代委員 それは、子育て短歌のところにも書いてあるんですけど、短歌で参加したわけじゃなくて、子育てというのが入っているから参加しているみたいな、やっぱり、何か教養とか知識を身につけるといよりは、自分が置かれた立場で、みんな共通する人が集まっているんじゃないかなみたいなことで集まってく人が多いんじゃないかなみたいなのはちょっと思いましたかね。

生島議長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか、御参加された方。根岸委員、お願いします。

根岸委員 今の話ですけど、やはり仲間づくりというのが主眼にあって、だからこそ1年間のスパンで固定メンバーでやるということがすごくよかったというふうに対象者の方もおっしゃっていたし、私もそうだと思います。多分、お話を聞いていると、彼女1人だけじゃなくて、周りの方もそういう方が多いだろうなというふうには思いましたね。

田代委員 それで、ちょっといいですか。うちのおやじはNHK学園の油絵の教室に何年も通っていたんですけど、やっぱり仲間はあんまりできないで、先生とのいろんなコミュニケーションはたくさんできるんですけど、やっぱり一緒に集まってきた人でどうこうというのはなかなかなかったんで、何か一つのことを突き詰めてやろうとすると、なかなか仲間というか、そういうのはできづらいんで、ちょっとその辺は、要は趣旨が違うのかなとは思っています。

生島議長 ありがとうございます。

ちょっと私も補足させていただくと、仲間づくりだけが主目的ではないと思うんですね。というのは、これ、1年間の講座があって、そこにはシルバー学習室という具体的な何か、例えば短歌を学べますということ掲げてやっているわけではないんですけども、なので、そもそも同じ世代の人たちが集まって学習活動しましょうということになっているので、やはり仲間関係をいかにつくっていくかということの一つの方法論としては鍵になるかと思います。でも、あと、これで終わりではなくて、その後、心遊会というのが大きい組織としてあるわけで、今度、そこは、同期というつながりとともに、もう一つ、テーマ別のサークル活動につながっていくんですよね。それが短歌の会だったりカラオケの会だったりという、今度、その自分のやりたいことというのを広げていく種を、ここの講座の中にもあるかなとは思いました。1年間の講座の中に。

ちょっと私もその辺は気になって、どういうふうな講座がどういうふうにつくられているのかということを経験の方に伺いました。例えば、やっぱり、今回いらした方のように、これは男性・女性に限らず、ずっと働いてきていて、国立には住んでいただけでも、あんまり国立のことを知らない。だからこそ、国立のことを知っていく、地域のことを知っていく講座であったり、そのことを知りながら、自分たちでまたそれを表現していく。だから、地域を散策しながら短歌を作って、そして、ただ自分で作るだけじゃなくて、その短歌を仲間同士で共有することで、表現し合うことで、あなたはそういうことを感じたのねと言って、またそれが仲間づくりにつながっていく。そういう内容

と方法を網の目のようにして組み立てられているというようなどころがあるのかなと思います。なので、内容もやっぱり健康のことであるとか、それから文章を書くというような、現役時代にはなかなかしなかったようなことであるとか、または自分の世界を開いていくような、そういう取っかかりになる事業というのはされているんだけど、そういう中に、やっぱり皆さんで共有してみましようとか関係をつくるような取っかかりがあることで仲間づくりがされると、やっぱりそういう講座の工夫がされていたのではないかなとは思いました。なので、単純に仲間づくりというだけじゃなくて、表現したりだとか考えたりしたりする中で仲間がつくられていくような、それがまた同じメンバーでずっといくので、どんどんとそれが打ち解け合えたりだとか、自分の内面を安心して出していけるような関係がつくられてくるということなのかなと私は伺っていました。

堀委員 ちょっといいですか。

生島議長 はい。

堀委員 要約は、感想抜きでまとめたつもりなので、ちょっと突き放して感想なども言っているいいですか。

生島議長 はい。ぜひぜひ。

堀委員 この方は、とても考えて選んで参加し、参加したからにはここまでこうと努力もしてこられた方です。意識して、退職後の地域の人間関係のことを考えやっけてこられた。いい居場所が作れて、この方にとってシルバー学習室や心遊会は本当によかったと思います。

しかし苦労したけど成功体験なわけで、この後の子育て短歌もそうかもしれませんが、いろんなタイプの方がいるでしょうが、わざわざ外からのヒアリングに応じてくれること自体が、結構、自分の中で整理できて話せるということ。端的に言えば、参加してうまくいった方なのではないか。大勢の参加者の中には、その活動にうまくはまれずにくすぶっている人も恐らくいるのではないか。参加してうまくいき、整理できているからアリングに応じて話していただいているのだろう、一般化はできないなあとは思いました。

もう一つ、すごく勝手な感想を言うと、仕事している時は地域にあまりなじめなかったから、仕事を辞めたら地域になじみをつくらないといけない、そうしないと寂しいと思うか思わないかというところかというと、そういうタイプの人もそうでないタイプの人もあるだろうとは思いました。非常に個人に引きつけて言うと、私はというか、あるいは男性はあんまりそう思わないのかなという感じも少しします。仕事をしている時期は、地元で御商売でもしていない限り、地元のことは希薄になりながら仕事していると思いますが、仕事を辞めたら地元に戻ろうとか地元のことを知りたいと特に意識的に思えるかということ、そういうタイプの方ばかりでもないだろうという感じはちょっとしました。

ヒアリング記録とは違うところで、感じたことを少し話しました。

生島議長 ありがとうございます。

ほかには何か御質問等いかがでしょう。内田委員。

内田委員 今、大丈夫です。

生島議長 何か聞かれて感想でもいいんですけれども、いかがでしょうか、松塚委員は。

松塚委員 ありがとうございます。本当に、インタビューを受けた方のお顔が浮かび上がってくるような、そんなまとめ方をしてくださって、大変ありがとうございます。幾つか気になるところは、期待していたことは何かということに対するお答えの中で、最後の4行目から5行目に「どんな活動をやるかはよく分かっていなかった」という一言があって、学びに対する何らかの目的を持って入ってこられたということではないというふうにこの言葉からは受け止められます。一方で、経験や対話から得られたことを学びとして御自身は位置づけていらっしゃるのではないかと思われました。最後の問いのところ、4ページの上のほうで、「シルバー世代である会員のそれぞれの事情や、事情があれば支え合おうと動く会員同士の信頼が見えてきて、大変だけれども、それが学びとなる」と、「学び」ということばを具体的に使っている。つまり、何らかの知識や技法を得るという目的ではない、しかしながら、身を置いてみたところ、その経験や対話がこの方にとっては学びとなっている。ですから、我々が一般的に捉える学びというものと、この方が考えている学びというのは必ずしも一緒ではない。そういった意味では、学びや学習というものをもう少し広義に我々自身が捉えていかななくてはいけないということを改めて感じた報告でありました。新たな勉強になる、私自身が勉強させていただくようなインタビューであったと思いました。

生島議長 今、松塚委員がおっしゃった、一般的に考えているような学びというのは、知識を獲得するというようなイメージで。

松塚委員 そう考えられがちです。特に生涯学習、学習という、学んで習うという、そういうふうに捉えられていることが多く思うんですね。そこにおいては目的がわりと明確である。しかし、そういった形の学習のみが必ずしも全ての学びではないということが今回わかったと思います。

生島議長 より広く学習ということをつまみ取っていくということが必要じゃないかと。

松塚委員 そうです。あと、御本人が学びだと思えば、それは学びだということじゃないかなと。

生島議長 分かりました。ありがとうございます。

堀委員 私も、今、言われたようなことはこの方は感じていらっしゃると思いました。会計をやって督促などしていると、体の不調その他で辞めようとか続けられないと思ったとか、家族関係の中でどうか、とかが間接的に見えてくる。それを、続けてもらうために周りの会員がどう支えているとか、そんなことをいろいろ言われていました。この方はそこで、むしろ新たなステージで学んでいる手応えを感じているようなことをおっしゃっていたと思います。

生島議長 荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 田代さんも根岸さんも質問していたと思うんですが、辞めていく人はいないんですかみたいなことを。あんまりそのことはおっしゃらなかったんですけど、御自分は心遊会で役職をもらえてよかったということですか、あと、

40年続いていて、今、心遊会の40年史を作っていて、忙しいんだけど、やっているみたいなことをおっしゃっていて。だから、この方はそれを学びと、役職をすることとか記念誌、40年ってすごいと思うんですけど、過去のことを学んで、そういうことをやっているのを学びと捉えていらっしゃるんだと思います。

それと、初めに思っていたのと違って、公民館のプログラムというか、講座が申し訳ないくらいに整備されていたということをおっしゃったんですね。講座内容というのは結構毎年毎年見直して、ずっと変えながら続いてきているみたいなんです。それもととてもよく考えられているみたいで、堀さんがおっしゃったように、シルバー学習室での学びの部分に、いろんな文化活動をするとか、市民の講座だけど、それを同じ方々と一緒に経験するというところで違ってきているということ。あとのクエスチョン5のところ、同じ俳句をやるのも、仲間がいるから心強くて安心なんだというようなことをおっしゃっていたので、講座からのつながりで心遊会での文化活動をする、創作して発表するというようなことができる仲間がいるということが、それがただの趣味とはちょっと違う経験になるのかなと思いました。

生島議長 ありがとうございます。

堀委員 そうなんです。シルバー学習室も子育て短歌会も、そういう意味では横の関係性が結構キーポイントになる、それを目指すような講座だと思えます。

さっき田代さんが言われてましたが、グループや集団の学びの場でも、必ずしも横の人と連携しながら学ぶことばかりではない。これはもちろん、講座の優劣ではありません。例えば油絵教室とか料理教室とか、中には協働性が求められ刺激になる場面もあるかもしれないが、基本は自分の技量を高めるために学んでいる。

今回、たまたまシルバー学習室はそうだし、子育て短歌会もたぶん、見せ合い、批評し合い、影響し合うことを目指す場というか、似たタイプの面があるのではないかと。しかし、こうではないタイプの集団の学びの場もあるはずですよ。

生島議長 まだちょっと、子育て短歌のほうはこの後共有になりますのでと思いますけれども、ほかにはよろしいでしょうか。

では、続いて、子育て短歌入門講座という、こちらのほうに話を移していきたいと思えます。こちらにつきましては、横山委員にまとめていただきましたので、横山委員のほうから資料に基づいて御報告いただければと思います。お願いいたします。

横山委員 シルバー学習室のヒアリング記録を見て、私のまとめは、何というか、すごく簡単過ぎちゃって、本当に申し訳ないんですけども、ヒアリング記録の詳細も後ろについていますので、こちらのほうを読んでいただくと分かっていただけるかなと思えます。

それで、今回は12月19日の12時半から1時半という1時間の間でした。インタビュー対象者がAさん、Bさん、Cさん、これは個人情報ということで、お名前は伏せてほしいということがありましたので、Aさん、Bさん、Cさんになっております。あと担当の方のDさん。この日は12時過ぎぐらいまで自主グループの活動があったので、自主グループの活動後にヒアリングさせていただきました。この自主グループとしての活動は今年で3年目だそうです。進行としては、事前にお渡ししていたものの流れで行いました。一つの質問に対して全員で答えていただくということで、すごく、ヒアリングの詳細を見てい

ただいても分かるように、結構たくさんになってしまったので、私のほうでその中から、私自身がその意見に対して思ったことを、ごめんなさい、矢印で勝手に書いてしまったので、矢印以降は私の気持ちだと思ってください。なので、矢印のところはちょっと割愛させていただきます。

最初の1番の、どうしてこの講座に参加したいと思いましたがという問いに対しては、“短歌講座”ではなく“子育て短歌講座”と具体的で親しみやすい講座だった。無料だった。これ、無料だったというのは講座だけであって、その後の自主グループとしての活動では月制の会費を徴収しているそうです。何かを残して、日記のように振り返ることができることがしたかったということで参加した方がいらっしまいました。

問い2の、講座参加の動機や、参加に当たっての思いをお聞かせくださいということに対しましては、短歌と子育てがぴったりと合っていた。同じ境遇の人たちとの集まりで安心できた。講座の終了間近になると寂しいという気持ちがあり、楽しい気持ちを続けたいことがグループをつくるきっかけになりました。

問3の、実際に学習活動に参加してみて、御自身のライフステージへの向き合い方に変化は感じましたかという問いに対しては、子育て中の葛藤や体調不良など、御自身がつらい思いをしているときの自分の中の不安とか大変さを歌で表すことで気持ちがとても前向きになった。誰かに聞いてもらって、同じような気持ちでいる人がいて居心地がいいと思いました。

問4の、学習活動は、今の生活にどのように生きていますかという問いに対しては、短歌を見返すことでそのときの子育ての一瞬を思い出せる。“ママ友”でもなく“友達”でもなく、同じ方向を向いている“私”という個人を認め合える“私”に戻れる場所。ほかの活動もチェックするようになった、情報を知りたくなったということがありました。

問5の、講師の先生以外から学んだことや大切に思ったことは何かということに対しては、先生が褒めてくれることで自分のモチベーションが上がる。皆で共有することで学びが深まっていく。短歌だけだったら高齢の方が多くて参加しにくかった、“子育て短歌”だったから参加しやすかった。同じ題材についても表現方法が全然違っていて、その人らしさが出ていて楽しいということでした。

簡単に本当に申し訳ありません。

生島議長 ありがとうございます。どこか、よろしいですか。矢印のところを今全部省いてしまいましたが。

横山委員 これは私の感想なのであれなんですけど、ただ、先ほど……。

生島議長 特に、はい。

横山委員 先ほどから、シルバー学習室のほうと同じだったんですけれども、やはり話を聞いていて、自分を認めてもらいたいとか、あと同じ気持ちを共有したい、共感したいという、割と現代的な、いろんな方が求めているところというのを受け取れたりとか、一緒にできるという気持ちを皆さん持っていらっしやるなということをしごく感じました。これはやっぱり団体で行っていく生涯学習の一つとしての形なのかなというのをしごく感じたヒアリングでした。ということです。

生島議長 ありがとうございます。

今、団体、集団で関わりながらやっていくということがありましたけれども、これは私もちょっといて、この回は2人だけだったので、私も少し補足をさせていただこうと思いますが、集団でというのもそうなんですけれども、先ほどのところもちょっと関わるかと思うんですが、ある意味の閉鎖性というのもあるんですよね。最近だと、誰でも、いつでも、居場所みたいにと行って開いていくということがあるんですけれども、ここの場合は、さっきのシルバー学習室とも共通すると思うんですが、ある意味、同じ課題を持った人たち、また同じ年代の人たちで集まって、いつもそのメンバーでやっていくからこそ、話せていけるとか、表現していける、自分の内面を出していける、そういうところから安心して活動ができる、そういう場がつけられているというところがちょっと特徴だなと思いました。きちぎちに固いわけじゃなくて、ちょうどいい形での閉鎖性というのがあると。でも、それがずっといくわけではなくて、ここで安心してやれた、その後何もなくなっちゃうのは寂しいので、今度それがサークル化になっていく、そういう、伴走する職員の方がいらして声かけがあるわけですけど、そのときには次のステップとしては、だから、子育て短歌入門講座を卒業した人たちの卒業生グループというふうにまたちょっと開かれるわけですよね。でも、そこもやっぱり同じ興味・関心を持った人たちが集まるという場につながっているという意味で、やっぱり共有できる安心感とか、共有できるであろう期待、そういう場がつけられているというところはあったかなと思います。なので、ここで、短歌という表現だけれども、ただの短歌教室ではなくて、あえて子育て短歌というふうにすることで、やっぱり皆さん、参加する方々がみんな子育てをしている人たちであろうと。だから、私も行けるし、何か面白そうだと思えたというようなお話はありました。とはいえ、ここ、2ページ目の一番上に横山委員が書いてくださっていて、私もとても印象的だったんですけれども、ママ友でもなくて友達でもなくて、同志なんだというふうな話をされていました。その同志というのは、妻でもなくて、母でもなくて、娘でもなくて、そうではない私を出してもいい、ここなら出せるという、私を引き出させてくれるような場所になっていると。そのツールというのが短歌という表現だったんだというふうなことでお話がありました。そういう意味で、自分の世界を表現できるという、その安心につながっているのかなと思ったところです。でも、そういう中でお互い人柄を知っていったりだとか、協業、共感できていく、そういうことがつけられていったということがあろうかなと思います。

作品をお互いに批評し合う会にもなっていますので、表現、発表し合って批評する会にもなっていますので、それぞれのつくられて発表された短歌で印象的だったものはありますかというような形で、お互いに、私はあの人のこういう短歌が印象的だったというようなことを説明していただくような時間もちょっと設けたんですけれども、私もそこは共感できたとか、こんな気づきをしたんだというようなことがあったかなと思います。それはこちらの資料のほうを見ていただくと書かれています。

ちょっと補足させていただきました。

いかがでしょうか。何か御質問があれば、さらに追加で。堀委員、お願いいたします。

堀委員 何人定員で募集された講座か、講座期間はどのくらいか。終了者の集いがあるようですが、講座終了から何年たって、そちらに何人が移り、どのくらいの方は今も残っているか。というような情報を伺えませんか。

話してくれた方たちは、非常に快い、いい体験をしているということでした。いい活動の場がもてて本当によかったと思います。しかし入ってうまく乗れた、

成功した人の体験のお話という感じはするのです。参加したが続かなかったとか、あるいは卒業後の集いには入っていない人も当然いるのではないかな。

もちろん参加した全員がうまくいかなければならないわけではないが、どうしてもフェードアウトしていく方はいる。こういうヒアリングは、残っている方が、自分の受け止め方というか、自分なりのどっちかといえbaumうまくいった体験を語るという構造にしかならないのではないかな。だからまず、そういう人数の外形の歩留りを伺えたらなと思ったんです。

生島議長 横山委員。

横山委員 私のほうでまず答えますか。

生島議長 はい。

横山委員 このサークル活動自体は今年で3年目だそうです。なので、人数とかちょっと詳しいことはお聞きできなかったんですけど、すごくこのときに印象を言われたことが、1年前、初めて子育て短歌講座をつくったときは、とにかく公園に行っておママ友さんたちにこの係の方が、こういうことをやるんだけど来ませんかということをおっしゃられたそうなんです。それで、もう無理無理集めていた。集めて、何とか講座を維持できるようにしていたということだったんですが、ちょっとびっくりしたのは、今年、3年目なのに、もう口コミで、声をかけなくても人が集まってくるようになりましたということは、すごく私、ここに書いていなかったんですけど、印象深かったんですね。あと、何人残ったかというのもちょっと私よく。今年、2人、3人ぐらいはこの自主グループに入るといふようなことをお聞きしてて、全体ではもしかしたら15人ぐらいだったような記憶があるんですけど、その中でも残られるのは3人という形が、寂しいのか寂しくないのかというのはちょっと分からないんですけど、そのような、とにかく今年3年目ですが、もう周りになかなかなくても口コミで広がったということは、それだけ皆さん、この講座に参加してよかったから口コミで広がっているわけであって、よくなかったら広がらないので、活動自体は成功といいますか、うまくいっているのではないかなという印象を受けました。

生島議長 ありがとうございます。

ちょっと補足させていただこうと思うんですけど、2ページ目のちょうど中間ぐらいにあります自主サークルですね。今のこの子育て短歌の会のサークルのほうは現在8名ですということです。過去3年やっている、講座自体はやっているのだから、確かに全員がサークルに残っていくわけではない。サークルに残っていこうとする意向は、でも、例えば今期やっている人たちだと、かなり多くサークルに残りたいというふうな意向はあるということなんですけれども、これは多分この世代特有の状況もあるかと思うんですが、育休中にこの事業に出ていて、それで、1年間とか育休のときにやっていて、それで、サークルに行くんじゃなくて職場復帰していくという方々もおられるというふうにお話はされておりました。だから、そういう意味で、何ていうか、成功というか、ただ、みんなネガティブな印象を持ってじゃなくて、とてもということではなくて、この時期にこういう講座を、短歌をつくるという、短歌をつくりながら日常を見詰め直していくという、その内容的なものを獲得して、ある程度仲間もできて、それで職場だったりお仕事に復帰していくと、そういうパターンもあろうかなと思います。

もう一点ちょっと、先ほどから堀委員から何度か、やっぱりここに来られる人、来ている人というのが、話ができ、うまくいっていた人だというふうなこともありましたが、私のほうでもう一つちょっと感想を言わせていただこうかなと思うんですけども、これまでの会議の中で、やっぱりそうじゃない人たちにも話を聞いていかなきゃいけないんじゃないかというような話題はずっと出ていたかなと思います。ただ、実際のところ、その方々にお話聞くとかというのは非常に難しいことなので、なかなかそれもしにくいと思っはいるんですけども、今回、私、2つのヒアリングを両方聞かせていただいたときに感じたことは、確かに、今ここでお話しされているという意味ではすごく積極的にやっておられる方々だなと思うんですけども、じっくり話を伺っていくと、初めからそうじゃなかった。初めからはそうではなかった。やっぱり来るときに、ここに来て大丈夫なのかなとか、やっぱりちょっと不安だなであるとか、その不安というのは、講座に対する不安じゃなくて、日々の生活とか自分の健康とか、それだけじゃない、本当に社会生活の中で不安を抱えていて、そこに、でも、ちょっとここなら来られるかもしれないという形で一步踏み出すきっかけになっていたというバックグラウンドを持っている方々もいて、そういう方々が何年か過ごしていく中で、こうやって我々に話をしてくださったというようなこともあるなということ、これは肌感覚ですけども、感じたところです。だから、来れていない、ここに来ている人だからうまくいった人なんだというだけじゃなくて、ここでどうしてそういうふうになっていったのかというような視点とか、そういうところから見えてくるもの、見ていけば、我々が持っている問いというのも少し材料が集められるんじゃないかなと思ったということは1つちょっと加えさせていただければと思います。

すみません、ちょっと。荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 質問なんです、横山委員のQ2のところ、これは御自分の感想ですとおっしゃった、その一番下の矢印のところに「グループを作ることができる環境が必要」という言葉があるんですけど、それは、インタビューした方たちからもそういうのが出たのか、それとも、横山さんが、こんなことがあったらと思われたのか。私、子育て短歌はやっぱり、最初は子育て中の方としか書いていないんですけど、保育についてという解説があって、保育を受ける子は市内在住の方のみと書いてあるから、結局、市民だけということですね。だから、保育環境とか、そういう環境というのは必要なかなと、ちょっと質問。

横山委員 このQ2の「楽しい気持ちを続けたい事がグループを作ったきっかけ」ということがあったんですけども、これは、1年目に初めてこの子育て短歌講座をやった後に、この講座を受けた方たちからの気持ちが出たんですよ。そういうことを続けたいということで。そのときに担当のDさんのほうで、じゃあ、つくってみましょうかとDさんが働きかけてくれたおかげで今のこの自主グループというのがあるそうなんです。だから、要はそのDさんという立場の人、みんなが作りたいね、作りたいよねと言って集まっても、誰かやっぱりそこに道をつくってくれる人がいるとそういうグループが作りやすいのかなということ、印象に思ったので、それをちょっと矢印として、環境という形なんですけれども、言葉で、それで私はここに書かせてもらいました。

保育が必要な方、子育て短歌講座自体は子育て世代となっていると思うんですけども、今回参加してくださった方は、お子さんが割と小学生だったり、もう保育園とか保育が必要ではないお子さんのお母様方だったので、あと市外から参加のCさんに関しては、ここにも書いてありますけど、市外からの参加という方がいらっしやいました。自分たちの住んでいる市には単発的な講座は

ある。でも、先ほどのシルバー学習室というのもそうですけど、1年かけて何回も繰り返すような講座がないから、国立にこういうのがあるのはとてもいいことだということはその方もおっしゃっていました。それはシルバー学習さんと同じ意見だなど、全く違う方でも同じ意見を持っている方がいらっしゃるんだということも感じました。

荒井委員 私、誤解していました。だから、保育が必要ない人は市外でもいいということですか。

生島議長 すみません。そこに関して言うと、このCさんも参加されているんですけど、基本的には、まずは優先的には国立市在住の方だそうです。なので、Cさんは、やりたいと最初エントリーしたときも、市在住の方で人数が埋まらなければいいですよというようなお話だったそうです。で、何とかはまれたというふうなことをおっしゃっていました。

横山委員 そうです。ごめんなさい。そうでした。

生島議長 事務局、お願いします。すみません、確認です。

事務局 では、事務局から。

先ほどから御質問の補足を含めてちょっとお答えさせていただくと、今、募集の要項としましては、市内在住の方のみとなっているのは保育のほうのみという形になっています。参加される方御本人が市内在住か否かというところは特段その募集のチラシのほうにもうたっておりませんで、対象としては子育て中の方というのみに今なっているということです。

また先ほどの御質問のところの毎回の子育て短歌入門講座の定員の人数ですけれども、これは10名で、いずれの年度も10名ということになっていて、全9回の講座であるという形です。

それと、ヒアリング記録の詳細の2ページ目の少し中ほどからちょっと下辺りのアスタリスクのところは補足情報としてヒアリングの後に担当者から情報をもたらしたところなんですけど、今年度行われている第3期の参加者の方、これが11名の方がいらっしゃるようなんですけれども、その方に今後の自主サークル活動への参加の御意向を伺ったところ、11名中9名が自主サークル活動に参加されるというか、サークルのほうに入られるという御意向を示されているというような話を聞いておりますので、先ほどの御質問、肝腎の数字の部分はそのような形になるというところでございます。

生島議長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。大森委員、お願いします。

大森委員 私からもいいですか。別のことでよろしいでしょうか。

生島議長 はい、もちろんです。

大森委員 大森です。

まず、横山委員に、大変丁寧に報告をまとめていただきまして、ありがとうございます。Q3のところ、2つの黒ポチでその意味をまとめてくださっているんですけど、私は大變的確にまとめていただいたんじゃないかなと思うんですね。1つ目の黒ポチが「自分の中の不安、大變さを歌であらわす事で気持

ちが前向きになった」というふうにとまめられていて、2つ目の黒ポチで「誰かに聞いてもらって同じような気持ちでいる人が居て居心地が良い」とまめられているんですけど、さらに詳しく、4ページのところが該当するんですけど、それを読むと、このまめめが的確なものであるということが再確認できるんですけど、1つ目の黒ポチはAさんですよ。4ページで、「私も子育てを短歌にすることで、結構辛いことや大変なことも面白い歌になって癒やされた」、これは自分自身の作品に自分が癒やされたということだと思ってしまうんですけど、「また子育ての楽しさとか幸せを、皆さんの歌を聞いて気づくことができたというのはすごく大きいことだなと思う」。自分の表現と自分以外の表現を聞くことが書かれていて、次、Bさんなんですよけれども、「短歌をただ自分で作るだけでもいいのかもしれないが」、これは自分自身で完結するよさですね。「それを誰かに聞いてもらって先生もちゃんとフィードバックしてくれて、一緒に同じような気持ちで参加してるメンバーからの反応が返ってくる。そういう場であるというのがすごく心地よく、一人じゃないと思える繋がりができたというのはとても大きかった」。ここで書かれていることに積極的な意義があるということは多くの人がかめることだと思うんですけど、今後、この会でできたらいいなと思うのは、この学習の積極性というのは突き詰めていくと何なのかというのをさらに分かりやすい言葉で明確にできると思うんですね。ちょっとまだ仮説的なんですよけれども、私が考えているのは、ここで参加者、学習者がされたことというのは、生活の事実を表現されているんですね、子育て。単なる生活の事実ではなくて、大変なことだったり苦労ですよ。生活の事実を表現する、それが作品になるんですけど、その表現、作品が自分自身と他者を励ましていくということなんですよ。何で私、こういうまめめをしたかということ、少し前なんですよけれども、桂正孝という教育学者がいて、その人が2012年度の宮城県の雄勝小学校の小学5年生が自分の苦労した経験を詩に書いているんですけど、その教育実践記録の意義をこうまめているんですね。切実な体験を記録にすると物語になる。物語の力で自分と仲間を励ました教育実践なんだというまめめ方をしているんですね。理解しやすいまめめなんですよけれども、このことの意味はかなり私は大きいような気がしていて、あと一言だけしゃべらせていただくと、少し前であれば教育関係者であれば絶対に知っている教育実践家に無着成恭さんという方がいらっしゃるって、武蔵小金井にお住まいだった方ですけども、1951年に刊行された『やまびこ学校』というのは日本で一番有名な教育実践記録の一つと言われているんですけど、そこで、戦後の様々な矛盾の中で子供たちが喪失感を持っているんですね。子供たちがそれを作文にするんです。そうすると、その作文を仲間もいいねと読んでくれて、子供たちのつらい気持ちが少し晴れていくんですね。無着さんの作品、みんないいと思っていたんですけど、どこがいいのかということを実は教育学者があまり言い当てられなかったんですけども、2011年の宮城の作文とか、そして今日またここで拝見したこのような記録で、やっとその昔の教育実践記録の価値も見えてきていると。ですから、私たちが今ここで行いつつある調査の意味というのは、教育の学説史、教育実践史の歴史を踏まえても、かなり大きなものになるのではないかなと思いました。

生島議長 ありがとうございます。非常に分厚い肉づけをしていただいたと思っております。ありがとうございます。

どちらも共通して、特に子育て短歌のほうに、表現活動というので、その表現も、ただ作品をつくるというんじゃないで、自分の生活と照らし合わせていく、それを共有していくというところが特に表されてきている。ここら辺は今回の答申のところにも一つの鍵になっていくのかなと思いました。

ほかにはいかがでしょうか。

内田委員　じゃあ、すみません。

生島議長　はい。内田委員、お願いいたします。

内田委員　質問ではないんですけれども、ちょっと、それぞれの報告を聞かせていただいて、そういうことかなと思った、感想みたいなことなんですけど、そもそもこのヒアリングは、ライフステージに応じた学習機会を検討するに当たって、その学習プロセスを伺うことで、どのように思ったり、どんな力になっていたのかというのを突き詰めていこうということヒアリングをしていただいたということで、今回のこの2つ、少し似ているところがあるなど感じるのは、シルバーのほうにしても子育て短歌のほうにしても、仲間づくりとか、仲間がいてよかったとか、同じ、そこでの居心地のよさみたいのを感じて、それがその後の自主活動にも大きく結びついている要因になっているんだろうなとは感じたところなんです。そのときに、例えば、シルバー学習室というネーミングがあるから、そういった同世代とか、同じような年代の方が集まりやすくなったり、あるいは、子育て短歌入門講座なんかは分かりやすいんですけれども、これ、単に短歌入門講座だったら多分参加しなかった人もいるだろうし、やっている内容とかも、内容が多分違ってくるんだと思うんですけど、子育て短歌入門というふうにネーミングしたことで、子育て世代の人が集まって、だからこそ、シルバーもそうですけれども、同世代だとか、同じような生活環境にいる方々が集まって、割と共感しやすかったりとか、仲間づくりもしやすかったりとかというふうになっていったんだと思うんです。そう考えると、ライフステージに応じた学習機会といったときに、1つは、そういった同じような世代の人が集まりやすい講座を意図的につくっていくことで、先ほど松塚先生のほうでもおっしゃったような、学びの中の広い意味での学び、そこでの経験したこととか人間関係のことを通して学んでいく学びというのは、この仲間づくりができたりすることで充実していくというふうにつながっていくのかなというように、今回のヒアリングはそういったところが見えてきたのかなというように思います。ただ、一方で、このライフステージに応じた学びを充実させていくときに、やはり、仲間づくりもそうですけれども、リスキリングとかも含めて、職業上必要な知識や技能を身につけていきたいというような、あるいは教養を高めていきたいとかというニーズも、意識調査の結果なんかにも結構そういったパーセントがあるので、そういったところも必要な世代というのがあるので、だから、仲間づくりとか、そういったところを結果として充実させていくような講座もあるし、一方で知識や技能をしっかりと身につけたり深めていくというところのニーズもきっとあると思うので、そういった講座みたいなものもちょっと確認ができたりするといいんじゃないかなというように思います。いずれにせよ、今回のヒアリングを通して、そういった同じような世代だとか境遇だとか、生活環境が似ている人が集まったことで内容とか、あと活動が充実して、その後の活動も広がったりとか継続していったというところにつながるような内容が見えてきたんだらうというのがお話をお聞きしての感想になります。

以上です。

生島議長　ありがとうございます。ちょっと答申のほうにも、諮問内容のほうにも引きつけていただきながらおまとめいただいて、全部、2つを串刺しにするような観点で感想をいただきました。ありがとうございます。

それぞれのグループのお話が終わったところで、そういうふうになら、次のステップにどうつなげていくかということをお話伺おうと思っていたところなんですけれども、そちらのほうに今、早速、内田委員のほうから話題を振っていただきましたので、まずは子育て短歌入門のほうにつきましてはよろしいでしょうか。

では、今ちょっと内田委員からもお話しいただきましたが、2つを踏まえて、今後どういうふうを考えていくかというようなところであるとか、または、共通して、今話題に出た以外にもこういうところもあったんじゃないかというようなところがあれば、ちょっとぜひここで共有していただければと思います。または次の、これ、この後どういうふうにしていくかというようなこと、今少し御提案も入っていました。仲間づくりであるとか、同世代のそれぞれの共有できる場という以外の観点で追加で、私たちの視点を広げていくということも必要んじゃないかというような御意見もいただきましたけれども。

松塚委員、お願いいたします。

松塚委員 内田委員の観点と共通することだと思えるんですけれども、シルバー学習室と子育て短歌入門講座の御報告を比べたときに、恐らく短歌のほうは一定程度の技能、短歌を歌うスキルを学ぶというような学び、具体的で明確な学びがあるということが少しシルバー学習とは違っている一方で、この二つに共通している部分は、同じような関心を持って、推測するならば、間違っていたら教えてほしいんですけど、恐らく豊かな方なんじゃないかなという印象を受けます。例えば子育て入門講座のほうは、無料だからと言いつつも、やはりそこに時間を費やしているということは、時間的な余裕は、子育て中であっても、少なくともその時間は働かなくてもいいという余裕がある方で、そもそも短歌に関心を持つということは、素養があって、教養的を備えている方というような印象を持ちますし、シルバー学習室のほうも、キャリアを積んできた方で、すぐに会計ができる方で、一定程度の技能を持ち合わせている方、ある意味金銭的にも余裕がある方なんじゃないかなというような印象を受けるんです。つまり、基本的には余裕のある方々が集まっているのではないかと。必ずしもそうではない方もいらっしゃると思うんですけれども、まずそこが認識として全くかけ離れて、間違っていたらばお教えいただきたいなということなんです。

その上で、ライフステージに即した、そういう観点で言うならば、我々は生涯学習という取組を扱う上で、目的、例えばリスキリングという目的のために、全く違った環境にいる方が集まるというような、いわゆる収入に結びつくような学びを期待して来る方々も同じように視野に入れているのかどうか。もしそうなのであれば、そのような活動にも焦点を当てた深い知識が必要になってくるというように思います。そういった意味で、これから何を論じていくのかということと関わってくるように考えます。

生島議長 横山委員、補足ありますか。

横山委員 私のほうからでいいですか。

生島議長 私のほうで後で補足させていただきます。

横山委員 大丈夫ですか。

生島議長 はい。

横山委員 先ほどの、金銭的に、時間的に豊かな方とおっしゃられたんですけれども、このインタビューされた方の中には、正直な話、ちょっと厳しいのかなという方もいらっしゃいました。厳しいながらも、やはりほかの人たちと接点を持ちたい。接点を持ちたいとかの気持ちがあった中で、やはり日頃お仕事や自分の生活に追われている中で出会ったのがこの短歌教室、子育て短歌講座だったという方もいらっしゃいました。だから、私的な印象は、私もQ1に書いたんですが、無料だったということがやっぱり行きやすさがあったんじゃないかなと。何か新しく始めるときに、例えば月3,000円ですと言われちゃうとやっばちゅうちょしちゃうんですけど、無料ですよと言われたら、まずやってみようかなという取っかかりにはなりやすいのかなとすごく思って、実際に、だからいらしたのかなと思われた、思うような方もいらっしゃいました。

生島議長 いらっしゃいましたというよりは、そういうふうには私たちが推測するというのかなと思いますけれども、私も横山委員と一緒にいるし、もう一つのほうもそうですけれども、決して初めからできる人たちではないし、みんながみんなすごく、例えば時間がある人たちということではなくて、むしろ積極的に時間をつくって来られていると思いました。ですから、働いていないわけじゃない。今いろんな働き方があるわけで、フリーランスの方であるとか、または、この時間帯なら、それ以外の仕事をしているというふうなお話をされてきましたので、決してそうではないと思います。また、例えば、もう一つのシルバー学習室のほうもそうですけれども、いきなり会計をと言われても、何をまずやればいかと。ただ、でも、何かやってくれと言われたから、はい、分かりました。何もやらないのもと、何かきっかけになるかもとやりましたと。最初、どうしていいか分からなかった。だから、もう本当にいろんなことを一緒に教わってきたというふうなことがあったので、初めからそういうスキルがあったわけではないというふうなことで、それも含めての公民館の活動だと思うんです。加えて言うならば、これ、やはり公民館でやっていることですし、この公民館は特に、誰一人取り残さない。無料だということも、みんなが来られるようにしていますから、むしろ積極的にそういう参加しにくい人たちが行けるようにしているということかなと思います。初めから高いレベルのものを求めているわけではなくてということで、カルチャーセンターとかとは違うということですね。

もう一つ、あえて皆さん方にも考えるきっかけで、諮問とか答申、これから照らし合わせながら考えていくに当たって、やっぱり市の諮問で、それに対して答申していくということになりますので、やっぱりこれから市としてどのような方策を取っていくことが必要か、ぜひ答申としてまとめてほしいというふうなことが言われています。市の生涯学習、学習機会の充実のためにということもあるので、やっぱりそこを意識していきながら、市であるとか市の施策または施設等でどんなことを考えていくことが必要かといったときに、やっぱり来にくい人たち、誰でも来られるというところを考えていく、市としてどういうことをしていくかということを考えていくことは必要かなとは思っていました。

大森委員 私からもいいですか。

生島議長 はい。

大森委員 大森です。

今、松塚委員からの問題提起を受けて、これはちょっと私が自分自身に言い

聞かせたいなと思っていることなんですけど、ある種の調査の課題によっては、参加者の経済的屬性というのは大変重要なことなんですけれども、重要なことであるがゆえに、そのことを論じるのであれば、多分、私より先生が詳しいんですけど、手続が必要かと思うんですね。多分この場で求められているのは、そういうところを推測することではなくて、ヒアリングに応じてくださった方は質問に応じて、その学習の活動がどういうものであったのかということについて丁寧にお話しいただいているので、そこから読み取れることを確実に読み取っていくということができればいいのかなというふうに私自身は整理しています。それで、着実に読み取っていくというのが、これはもう本当になかなか難しいところだと思うんですけども、私も丁寧にやりたいなと思っているところがありまして、例えばシルバー学習室の4ページなんですけれども、上から5行目を見ますと、「シルバー同士の人間関係は、ざっくりばらんで隠しごとが少なく、心地よく感じる」と書かれているんですね。そうすると、これは私自身もそうなりがちなんですけれども、やっぱり同世代を集めると、こういうよきことが生じるんだなと一瞬読めてしまうんですけど。

堀委員 そうなんですよね。

大森委員 恐らくそれだけではなくて、これはシルバー同士一般ではなくて、この講座と心遊会で作られたシルバー同士の人間関係は、ざっくりばらんで隠し事が少なく、心地よいと読むのが正確な読み方だと思うんですね。

堀委員 あるいは……。

大森委員 ちょっといいですか。この講座と心遊会で作られたプロセスもこの記録の中には書かれていまして、それが2ページの下から3分の1のところなんですけれども、まず学習者が、事実の問題として、「自分はこの年6月には、突然、乳がんが見つかり、気持ちは大変だった」。これはまだ学習が展開し出す前の学習者の事実が1段階目に書かれています。2段階目は、「そもそも最初の自己紹介で、がんで長期闘病中だと語った方がいた」。不安を抱えていたんですけども、自分と似た境遇の方がそのことをお話しになったということですよ。それが条件になって、御自身も「また、自分はがんだと分かったことを話す」ことができたわけです。これが第3段階目。そうすると、それに対して、期待していたのと違う反応があるんじゃないかと、一番欲しかった反応が出てくるんですね。「今、実際に闘病中だという方や、前にかかった経験をフランクに話してくれる方も多く」、その結果、そのことを「こういう人との関係は貴重だと思った」。一例ですけども、先ほど結論的に彼女が書いていたことのプロセスがここに描かれているので、恐らくそういうふうに取り取っていくのがいいのかなとちょっと思っているところです。

生島議長 追加。

松塚委員 今、横山委員と議長から、どのような方がいらしたかということを知って、とても理想的、うまくいっているというふうを感じるんですね。そうすると、生涯学習ということを考えるとき、それもライフステージに即したというようなことを考えるときに、もちろんうまくいっていることを継続的に維持し、できればもっと強くしていくということが当然の進め方だと思うんですが、一方で、何かもっとやらなくてはいけない部分があるのかというような問いを立てていくとするならば何であろうかということだと思えます。今回の二つのヒ

アリングにおいては、非常に理想的な、国立市の強さというのがしっかり出ている活動であって、そこを維持し、できればもっと広げていきたいという、それはごく自然かつ当然のことだと思うんです。ただ、この委員会で、じゃあどのように諮問に答えていくのかということが問いであった場合、例えば経済的属性を掘り下げていくこと自体は問いではなく問に答えるための糸口というか、その糸口を開いていくことが今後大切になっていくのではないかと思います。

生島議長 ありがとうございます。やっぱり今ここでは見えてこないものということに対して目を向けていかないといけないと。じゃあ、それをどこに持っていかということは大変な視点だったと思います。もう一つ、ただ、今、私、あえてここで、この2つから、理想的だからもういいかということ、それだけではなくて、これがどうしてなり得て、できるのかということをお我々やっぱり見えないといけないし、そこを検出していくことがより、これをまた続けていたり、さらに後押ししていく形にもなろうかと思うので、そういう意味でここもやっぱり大事にしていこうかなと、していかないといけないなというのは。

松塚委員 それはもちろんです。

生島議長 はい、はい。と思います。ありがとうございます。
ほかにはいかがでしょう。寺澤委員、お願いいたします。

寺澤委員 この2つの話を聞いて、すごい何か面白いなと思ったんですけども、先ほど内田委員おっしゃったとおり、シルバーとか子育てとか、そういう同世代というのがきっかけで入りやすかったというのはもちろんそれぞれ共通していると思うんですけども、子育て短歌の場合は、何しろ短歌を学ばなかったという明確な目的があって、そこに子育てとついたので、同世代の中でやりやすくだらうと思って来た方々。でも、シルバーの学習室のほうは、テーマというのはそんなに気にはしていなかった。とにかくそういう同世代の中に入っていくたかったというのがやっぱり第一のきっかけということで、これは世代の違いなのかな、それともたまたまこの2つがそういう感じになったのか、ちょっと何か面白いなと。短歌はやっぱり、今はやってきてはいるとはいえ、野球とかサッカーとかみたいな感じのメジャーさはないと思うんです。そこに引かれた方々。何かすごい面白いなと感じました。だから、そういう講座をつくっていくときには、やっぱりその世代に応じた、そういう視点というのも大事でしょうし、あとは、子育て短歌で一番最初、公園に行ってチラシを配ると、やっぱりその感覚もすごい。職員の方々はすごいなと。どこに行ったら一番そういうニーズがつかめるのかというのが分かっているってすごいなと思ったり、ちょっと面白いなと思いました。
すみません。感想です。

生島議長 いえ、ありがとうございます。とても大事な感想をいただきました。そうですね。短歌のほうをお聞きしたときに、自分の生活をゆっくりと見詰める時間が欲しかった、短歌を学んだことで私はそういう武器を得たというような話が出て。

寺澤委員 面白いですね、それね。

生島議長 そういうふうにして日々の生活を大切に見詰めていく武器というか、視点

の持ち方の、そのやり方が短歌、すごくヒットしたという、これも初めてみないと分からなかったのかもしれないですけど。

寺澤委員　そうですね。

生島議長　ありがとうございます。

内田委員、お願いいたします。

内田委員　この2つの講座の、前に頂いた募集のチラシを見てみると、シルバー学習室のほうは、様々なことを学びながら、同じ市内で暮らす仲間との交流を深めていく講座ですというフレーズがあって、そこで集まってきて、すごく充実した。一方で、子育て短歌入門講座のほうは、子育ての日々を31音で語り合おうというキャッチフレーズ、子育ての日々を語り合おうと。やっぱり子育てで大変なところなので、そこをお互いに語り合いたいと。それが、短歌を学ぶというのももちろんあるとは思いますが、この子育ての日々を語り合いたいというところが多分響いたのかなという気がします。だから、そういった意味では、この講座のチラシというか、その辺は結構響いて、それぞれ、そこに、ニーズに、それを求めている人たちに結構響いて、それで人が集まって活動が充実したんじゃないのかなという気がします。

生島議長　ありがとうございます。

さて、いかがでしょう。ほかに何かあれば。

これからのちょっと作業課題というか、作業も考えないといけないんですけども、今ちょっと幾つかお話が出ていますけれども、やっぱり、今回の2つというのは2つとして、やってみると成果が出てきて、ここで我々だけで議論していたのでは見えなかった実態というのが見えてきたかなとは思っています。そういう意味では、もう少し視点を変えてであるとか、また違った視点で別のアプローチをしていくということも、まだ時間的にはありますので、必要かなとは思っておりました。今、松塚委員からお話あったことですか、もう少し違う視点でということかなと思います。

実は前回の会議のときにその点について、内田委員からだったと思うんですけど、御発言があったのが、前回は生涯学習推進計画の進捗状況の中間評価という形で出された資料、これなんですけれども、でも、よく考えると、そもそも各世代の学習機会の充実というのは生涯学習振興計画の中に柱として位置づけられているものであって、当然ながら、これにひもづく形で講座であるとか学習機会が含まれていると。ついては、ここをもう一回ちゃんと見ながら、これからの私たちの議論していく素材になるようなものというのに注目してみてもいいんじゃないかというような話がありました。そういう意味で、ちょっとこれは別のことで、中間評価のことで配られた資料なんですけれども、ぜひ今月から来月までの間で改めてちょっと見て、今日の議論を踏まえながら、これを見てきていただいて、ぜひ次回に、今回はこういう2つはこうだったから、もっとこういう視点で見てみたらいいんじゃないか、答申につながるような素材というのが得られるんじゃないか、ちょっとそのアイデアを練ってきていただけないかなと思いました。これは何か特別シートを作ってきてほしいとかというよりは、ざっくりばらんにお話ができるように、アイデアをぜひこの場に持ってきていただければとちょっと考えてみたんですけども、いかがでしょうか。例えば、この会議の前のほうにもありましたけれども、国立市でこう見ても、やっぱりここにはないから、じゃあ、ないけど、やっぱり大事な視点だから別の自治体見てみようということのアイデアでもよろしいかなと思うん

ですけど、ちょっとこれが一つの手がかりになるかなというアイデアも今までの会議の中で出していただいておりますので、次回これを少し見てみたいなとは思っております。よろしいでしょうか。御異議なければ、そのようにして次回進めさせていただこうと思っておりますが、いかがでしょうか。ちょっと、ですので、今日の議論、それからあとは諮問内容、そして、この情報ですね、資料。これらを少し俯瞰しながら今後の展開についてアイデアをお寄せいただければと思います。よろしいでしょうか。

では、今日のこの諮問につきましては以上にしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。ありがとうございます。堀委員、横山委員、おまとめいただきまして本当にありがとうございます。今日の十分な材料になりました。

それでは、次第3ですけれども、生涯学習振興・推進計画の進捗状況についてに入ります。前回、内田委員より、定量評価について御質問の件がありました。この件について、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局でございます。

まず、先月の定例会の中で生涯学習振興・推進計画の進捗状況について御報告させていただいて、何か質問がありましたら事務局にお寄せくださいということとさせていただいたんですけれども、御質問ありませんでしたので、前回定例会の中で内田委員からお話ありました件について御報告をさせていただければと思います。

具体的に、事業評価方法の検討という事業の中で、中間評価に対しまして社会教育委員の会より定量評価がなされていないという指摘があったと。その中で、御質問としては大きく2点。1つ目としましては、定量評価はできていなかったと理解していいのか。また、2つ目としまして、定量評価の方法を今後検討していくのかという御質問があったかなと思います。

中間評価に関しまして、少し経過のところから御説明させていただければなと思っております。まず、生涯学習振興・推進計画でございますけれども、こちらは令和元年度に策定したものになりまして、10年間の計画、令和元年度から令和10年度末までの計画となっております。ただ、計画策定、令和元年度に策定した時点では、中間評価と、また計画終了時に評価をするということになっているんですけれども、その評価方法を確立できなかったのが、計画の中に、事業評価方法を検討した上で評価してくださいねということが重点施策の一つとして位置づけられたというもとの経過がございます。それを受けまして、第23期、今より3期前の23期の社会教育委員の会において適切な事業評価方法の検討がなされまして、令和3年4月27日に社会教育委員の会議より「『適切な事業評価方法の検討』について（意見）」というものが教育委員会教育長に対して提出されたというものでございます。

その意見を踏まえて、事務局のほうで中間評価の方法をどうしていくかということを検討させていただいて、それで、次の期、第24期の社会教育委員の会に対しまして、中間評価の考え方ですとか、こういった評価のフォーマットというんですかね。それをお示ししまして、御提示をする中で御意見をいただいたと。意見をいただいたことをまた踏まえて修正を加えた上で、中間評価を実施させていただきました。

ちょっとすみません、長くなって恐縮なんですけれども、中間評価を実施させていただいて、次の期、第25期の社会教育委員の会に対しまして中間評価の結果を報告させていただいて、その際に委員の1人から、定量評価ができていないというような御指摘をいただいたということでございます。我々としては、社会教育委員の会に対しまして意見をいただいたり、また、意見をいただいたことを踏まえて評価方法を確立する中で、社会教育委員の会に対しま

して、こういう評価やりますよというところでお示ししておりますので、当然、いい評価するつもりでさせていただいたというところなんですけれども、ただ、そういった御意見、定量評価ができていないという御意見をいただいたというところなんですけれども、もともと生涯学習振興計画には数値目標、例えば何々を何%上げるですとか、何を何人以上ですとか、そういった目標が定められているわけではありませんので、そういう意味で定量評価というところでは少し限界があるのかなとは感じつつも、ただ、御意見としてはもちろん深く受け止めさせていただく中で、中間評価と同時に、あわせてまた計画終了時、実際には計画終了の少し前になると思うんですけれども、また評価をさせていただくことになりますので、それまでにまた評価方法をさらに研究させていただいて、また、必要に応じまして、これは確定した話でなくて、ちょっとどうなるかというところはあるんですけれども、また社会教育委員の会に対しましても意見を伺えれば。やるとしますと、今期ではなくて次の期になってくるかなとは、時期としては思いますけれども、御意見を伺いながら、また最終、計画終了時の評価方法を確立できたらなと考えているところでございます。
長くなりました。以上になります。

内田委員 経過も含めて、よく分かりました。どうもありがとうございます。

生島議長 ありがとうございます。

ほかにはよろしいですか、皆さんから。

そうしましたら、この件についてもここで終わらせていただきます。

議事は以上になりますが、続きまして、次回の定例会につきまして、事務局よりお願いいたします。

事務局 事務局です。

次回の定例会について連絡させていただきます。第10回の定例会になります。2月25日水曜日、午後7時からです。場所は、隣のFSXアリーナ第1・第2会議室で行います。

また、令和8年度の毎月の会議の日程についてそろそろ考えていきたいと思っております。現在、月末の水曜日になっておりますが、令和8年度の皆さんの御都合をお聞きして決めていきたいと思っております。次回の定例会の前、大体2月の2週目ぐらいに皆様にメールで御案内を送りますので、回答のほうをお願いしたいと思います。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

そのほか、委員の皆様方から何かありますでしょうか。よろしいですか。

なければ、本日予定しておりました案件は全て終わりました。次回の会議は2月25日水曜日、午後7時から、FSXアリーナ第1・第2会議室で開催いたします。

これをもちまして、本日の会議を終了いたします。皆さん、お疲れさまでございました。

— 了 —